

# 令和7年度 総務常任委員会視察レポート

委員氏名	西田武史
------	------

視察先	東京都荒川区	テーマ	荒川区自治総合研究所と荒川区民総幸福度（GAH）の取組について
-----	--------	-----	---------------------------------

日 時	10月30日（木）13時00分～15時00分
-----	------------------------

**市政の課題の解決に向けて、参考になると思われることと考察について**

2004年当時の区長の「区政は区民を幸せにするシステムである」と言う強い思いからこの取り組みが始まっているが、大きく感じたことはトップの思い入れの強さとリーダーシップが実現に至らしめ、長きにわたり継続されている事や、新たに変わられた区長も継続して推進していることが、いかに荒川区にとって良い事業であることがかいみられた。全国62もの自治体や民間団体が賛同し、「幸せリーグ」という組織を立ち上げられている事も本気度の表れであると痛感した。今後、本市としてもまずは市長の熱い思いとリーダーシップを發揮して頂けることを切に願う。

# 令和7年度 総務常任委員会視察レポート

委員氏名	河合 達雄
------	-------

視察先	東京都荒川区	テーマ	荒川区自治総合研究所と荒川区民総幸福度 (GAH) の取組について
日 時	10月30日 (木) 13時00分～15時00分		

## 市政の課題の解決に向けて、参考になると思われることと考察について

今回1日目の視察として東京荒川区自治総合研究所(区役所内)を視察させていただきました。本文に入る前ですが荒川区職員の対応に驚きました。

我々視察団が区役所入りし担当者の案内でエレベーターに乗って本会議場のあるフロアに案内されエレベーター降りると職員数十名が両サイドに分かれ拍手で出迎えていただき更に職員の丁寧な挨拶で我々歓迎を受け感動を覚えました。

各地方に視察は何回も行きましたがこんな対応初めてでびっくりした次第です。

さて私がここの視察を選んだのは人の幸福度はものさしで測る事できるのかな?と疑問に思い区民はこの地に住んで幸せを感じているのか?等、荒川区自治総合研究所の人達のお話をお聞きしました。

荒川区政は区民を幸せにするというシステムがある。という考え方を明示し区民の幸せを政策に加えているというのは画期的且つ先進的な取り組みをしてると思いました。

心の豊かさや幸福度を行政運営の尺度とする考え方を明文化しそれを実際区民の幸福度にアンケートを取って、その結果悪いところを直し良いところは更に強化する。といった取り組みはなかなか区政に余裕がないとできないなあと思いました。

継続的なデータ収集と分析で過去10年間のアンケート結果の推移を反映し定期的にレポートを出し現況報告をしてる事で幸福実感の傾向や分野別に改善等されているか?課題は何か?を常時調べて研究しているので区民の幸せを本気で考えているところは感心しました。

住民との意見交換や地域の説明会等幸福をテーマにして地域で考えるコミュニティーの場を持ち幸福度の向上に努め行政だけでなく住民もどうしたら幸せになるのか?を当事者として色々な会合に参加し職員、区民互いに相乗効果を産み出している。

荒川区は住み良く区民の人口も増加傾向とは思いますが近年、少子化の波が大き過ぎるのでやはり現状維持が難しい時代でもあると思うので色々工夫しながらでも維持していくかないと感じます。

本市も他市からみると現状かなり悪いイメージが付いてるので今まで人口増加どころか右肩下がり。

やはり現状を打破するには市の中身をえていかないとこのままでは周辺の市町村よりかなりの遅れを取り何をしても後手となって市民の不安に繋がると思います。

それに職員の士気、各個人の考え方を変えて、もっとヤル気の出るように考えていかなと思いました。

今回この視察に行って思った事は職員、市民の互いのヤル気で互いに幸せに繋がって行くように思いました。

市民はもっとレベルを上げ職員自体も士気を高めて派遣や他の会社に依頼ばかりせず1人1人職員が自分でもっと岸和田を良くしようという考え方でないと良くなつて行かないと思いました。

本市も市民総幸福度に取り組んで欲しい。

# 令和7年度 総務常任委員会視察レポート

委員氏名	永野 紗代
------	-------

視察先	東京都荒川区	テーマ	荒川区自治総合研究所と荒川区民総幸福度（GAH）の取組について
-----	--------	-----	---------------------------------

日 時	10月30日（木）13時00分～15時00分
-----	------------------------

市政の課題の解決に向けて、参考になると思われることと考察について

GAHは、従来の経済指標だけでは捉えきれない住民の幸福や満足度を総合的に把握し、行政施策に反映させることを目的とした指標である。区民にアンケートを実施し、健康・教育・経済・生活環境・コミュニティ・防災などへの意識を多面的に測定し、区民の主観的な幸福度を重視している点が特徴である。

幸福度の低い分野を分析することで、行政施策の改善に役立てることができる。例えば、参加者が高齢化していた防災訓練を見直し、大人から子どもまで防災を学べるイベントに切り替えた事例がある。このように分析結果を深掘りすることで課題を発見し、具体的な改善策を実行できる点が有効であった。

市民の実感を尺度に、施策評価を行う仕組みを導入することで、行政施策をより生活者目線に近づけることができる。また、住民参加型の指標づくりを行うことで、行政への信頼や自治意識の向上が期待できる。幸福度という価値を行政と市民が共有することにより、協働によるまちづくりの基盤が強化されると考えられる。

つまり、GAHを導入することで、本市においても、市民の幸福を中心に据えた持続可能な自治体運営が可能となり、市政課題を把握するための有効な手段として活用できる。

# 令和7年度 総務常任委員会視察レポート

委員氏名 南 加代子

視察先	東京都荒川区	テーマ	荒川区自治総合研究所と荒川区民総幸福度（GAH）の取組について
日 時	10月30日（木）13時00分～15時00分		

## 市政の課題の解決に向けて、参考になると思われることと考察について

荒川区では、区民の主観的な幸福感を可視化し、それを行政施策に反映する仕組みを構築しており、自治体としての在り方や市民との関係性を改めて考えるきっかけとなった。

GAH（荒川区民総幸福度）は、区民アンケート調査をもとに、「健康福祉」「子育て教育」「産業」「環境」「文化」「安全安心」の6分野に分類された計46の指標で構成されている。これらの指標は、区民の生活実感や価値観を反映したものであり、単なる統計ではなく、幸福の“実感”に焦点を当てている点が特徴的である。分析結果は区の基本計画や個別施策に反映されており、政策形成の根拠として活用されている。

特に印象的だったのは、2024年でこの取組みから10年を迎えること、区民の幸福実感の変化をまとめた冊子が策定された点である。これにより、区民自身が「自分たちの声が政策にどう活かされてきたか」を実感できる仕組みが整えられており、行政と市民の信頼関係を築く上で非常に有効な手法であると感じた。

また、荒川区はこの取り組みをさらに発展させ、「幸せリーグ」という基礎自治体連合の発起人となり、現在では全国62の自治体が参加している。住民の幸福実感向上を目指す理念を共有しながら、互いの取組みを学び合うこのネットワークは、自治体が単独で課題に向き合うのではなく、横のつながりを通じてより良い地域づくりを進める新たなモデルであると感じた。

視察を通じて改めて実感したのは、行政機関は市民が困ったときの「最後の砦」であると同時に、「この町に住んで良かった」と思える幸福実感を呼び起こす存在であるべきだということだ。そのためには、制度や施策の整備だけでなく、市民の現状や「こうなればいい」という期待の声を、継続的に聞き取り、受け止める姿勢が不可欠である。

荒川区のように、アンケート結果を施策に反映し、その変化を市民に見える形で

示す取り組みは、行政と市民の信頼関係を築く上で非常に有効である。市民の幸福実感を行政の目的として位置づける姿勢は、自治体の本質的な役割を再認識させてくれるものであり、岸和田市においても、こうした理念と仕組みの導入を検討する価値があると強く感じた。

# 令和7年度 総務常任委員会視察レポート

委員氏名	友永 修
------	------

視察先	東京都荒川区	テーマ	荒川区自治総合研究所と荒川区民総幸福度（GAH）の取組について
日 時	10月30日（木）13時00分～15時00分		

## 市政の課題の解決に向けて、参考になると思われることと考察について

荒川区自治総合研究所がどのような組織で、また、その組織が行うアンケートにより、どのような結果が得られているのかなど説明を聞きました。荒川区から独立した組織であること。しかし、構成員7名のうち、5名が区の職員が出向、2名が研究員であり、区からの補助金を研究費にあてているとのこと。そこで、区の職員が出向しているとしても、区の事業に対して意見等（口を出す）を行うことに対して、庁内での摩擦は起こっていないのか疑問に思い訪ねてみたが、そういうことは起こっていないとのことでした。区長が変わり、この取り組みに対する新区長の思い入れが非常に強かったことが理由ではないかと付け加えておられました。調査については、①健康・福祉②子育て・教育③産業④環境⑤文化⑥安全・安心などのテーマで、質問項目を5段階評価するものです。これを毎年行っており、ここ数年の結果をグラフで見ましたが、例えば⑤文化のグラフでは、令和3、4年がぐっと低い数値になっていて、これはコロナにより、文化に関する事業や活動が取り組めなかつたことが、しっかり繁栄されていました。継続して取り組むことにより、区民が幸福を感じている度合いと幸福を感じるための重要度（ニーズ）が一つのグラフに表され、区民サービス向上のために、何が今必要な取組なのか分析できるようです。その分析結果から、具体的な施策につなげるため、提言等を行い、実際に区の部局が事業化する流れが出来ているようです。実際に、荒川区民の総幸福度は右肩上がりに上昇しているとのことでした。20年後の荒川区の目指すべき将来像として「幸福実感都市あらかわ」と荒川区基本構想を策定されています。幸福度が増せば、郷土愛も大きくなると思いますし、地元から転出しようとする考えも起こりにくくなるのではないかと考えます。そのための取組の一つとして、総幸福度アンケート調査は有効だと思いました。岸和田市におきましても、調査・研究すべきではないかと考えます。以上

# 令和7年度 総務常任委員会視察レポート

委員氏名	岸田 厚
------	------

視察先	東京都荒川区	テーマ	荒川区自治総合研究所と荒川区民総幸福度（GAH）の取組について
日 時	10月30日（木）13時00分～15時00分		

## 市政の課題の解決に向けて、参考になると思われることと考察について

荒川区自治総合研究所は市からの派遣が5人、財団職員が2人、補助金として研究所に市から支出されている。

財団独自の研究機関のようではあるが、研究内容は市と協議を行いテーマを決めているようである、現在の研究所の主な仕事は、毎年行っている「荒川区民総幸福度（GAH）」の分析がおもな業務と感じた。

調査研究費については補助金の枠内で行うということなので、独自の調査研究を行うことは難しいように感じた。

自治総合研究所という市からの独立財団なので、独自の研究テーマを決め行っている機関であると想像していたがそうではなかった。

「荒川区民総幸福度」の調査については、毎年同じ項目で調査することにより統計的には変化が分かりやすいということではあるが、幸福度を調査する項目としてふさわしいのかは、項目の検討することが必要であると感じた。

「幸福度」という個人的な意識を点数化して市の施策につなげていくという

また、毎年項目により点数が異なるのはなぜなのかの分析は行われていないようであった。

「幸福度」を求めるることは大切だが、それぞれ幸福の概念が抽象的なものを、無理やり数値化することが、市民の幸福度につながるのかは疑問に感じた。

市の施策に生かすことについては一定の指標としての参考にはなることは期待できるのではないか。

本市も毎年行っている「市民意識調査」をうまく活用すれば、十分活用できるように感じた。